

水稲乾田直播を中心とした水田二毛作における
機械利用組織の一事例

八 木 義 隆

(佐賀県農業試験場)

YATSUGI, Y.

An Example of Machinery Utilization System in the Double Cropping
Including Direct-Seeding Rice Culture on Upland Field.

佐賀県においても行政的施策により各種の大型機械が導入されさまざまな利用組織がみられるが、いずれもいろいろな矛盾が露呈して見るべき成果をあげるまでに至らず、組織の再編を強くせまられている。このことはとくに水稲の直播栽培地帯に強い。したがって水稲の乾田直播を中心とした水田二毛作経営において大型機械が経営発展に大きな役割を果たすためには、如何なる利用組織を組み、それを運営したらよいか、について実験農場において実証的に検討を行なったのでその概要を報告する。

現在の機械利用組織の状況をみれば、ほとんどの組織が組織内の必要作業量と導入機械の作業能力とがマッチせず、必要作業量が機械の作業能力をはるかに上回っており、したがって農家は個別機械の排除ができず、また農作業は季節性が強いと多数農家による利用組織では機械の利用が時期的に集中して個別経営に十分対応できないなどいろいろな問題があり、大型機械は個別機械の単なる補助的役割しか果たしていない現状にある。

我々が実施してきた実験農場においても、当初は全農家30戸を1組織とし、オペレーターを選定して利用組織を組んだが、前述のごとく組織規模と導入機械規模とのアンバランス、30戸1組織では組織が大きすぎて運営がやりにくく個別経営への対応がむづかしいなど問題が多く、47年全面的な組織の改編を行なった。

つまり組織規模については全農家30戸、58.5haを5ヵ班に分けて1班当り6戸、11.7haとし、每班に一連の機械を整備して主作業は共同作業を行ない、各班毎に作業を完結するようにした。なお組織の運営は作業計画より作業の実施、経費の精算まですべて各班の自主的運営にまかせ、組織全体の作業計画、班間の調整などは各班の

班長が役員となって協議決定することにした。

また機械の導入整備にあたっては、今までの実験結果から班内の必要作業量と機械の作業能力とがよくマッチするよう十分勘案して、各班毎に24P Sトラクタ、6条用ロータリーシーダー、4条刈自脱型コンバインを各々1台ずつ導入し、高能率なスプレーヤーは各班の共通機械として全体に1台導入した。

作業の実施は主作業はすべて共同作業とし、班内全労働人員12名を作業毎に必要な組作業人員にわけて配置し作業を分業化して、各種の作業が同時に並行的に行なえるようにした。

この結果、春作業においては分業によって麦、玉葱の収穫、稲播種が能率的にしかも並行的に進捗し、乾田直播を中心とした水田二毛作の最も大きな問題である稲播種作業の雨対応、稲播種と裏作収穫との労働競合が大幅に改善され、今まで裏作の栽培面積は玉葱を1戸当り45a栽培すれば麦の栽培は労働的にほとんど不可能であったのが、玉葱50a、麦60a栽培してもまだ労働的に余裕さえ見られるようになった。また秋作業についても能率よく適期作業ができるばかりでなく、最も価格の高い時期に運根の掘取出荷も容易になった。

要するに水稲直播を中心とした水田作における機械利用の組織単位は、とくにできるだけ小さい方が個別経営に対応しやすく、また機械装備も実際に利用してみて24P Sトラクタ、6条ロータリーシーダー、4条刈自脱型コンバイン程度の大きさが手頃で利用もしやすく、作業の分業も行ないやすい。これよりみれば組織単位は機械の作業能率よりみて、これらの機械1セット当り農家5～6戸、10～12ha程度が適当と思われる。